

分娩間隔と初回授精

1頭でも不受胎による淘汰牛や長期不受胎牛を減らし、乳牛という資産価値を長く十分に引き出していくことの重要性は、今後とも変わることはないでしょう。



繁殖状況がどの程度にあるかを判断するため、よく「分娩間隔日数」が指標として用いられます。参考となる数値ではありますが、これには留意すべき点もあります。

まず分娩間隔は、当然ながら“分娩した乳牛”によってもたらされる数値（分娩月日一前回の分娩月日）です。授精を行ったものの残念ながら不受胎と判別され、次の授精のチャンスを与えられなかった乳牛には分娩間隔が発生しません。この受胎牛への移行を諦めるタイミングは、農場によって一律ではありません。その結果、長期分娩間隔牛がどの程度いるかは農場によって異なりますから、牛群の分娩間隔日数の平均値はおおいい変動しやすくなります。



またその牛の産乳能力や乳房炎などの発症状況、さらにはその時の乳価や乳牛の市場価格などによっても変わってくるでしょう。このように数値が表されるまでの前提が異なったり、変化したりするので、分娩間隔を農場間や平均値と単純比較しても簡単に判断できないことがあります。

さらに分娩間隔という数値は、1年～1年半ほど前の授精・受胎の成果を表したものです。今現在の繁殖管理の状況と一致するとは限りません。

なるべく直近の繁殖管理の状況を知るには、「初回授精日数とその受胎率」が重要な情報となってくれるでしょう。

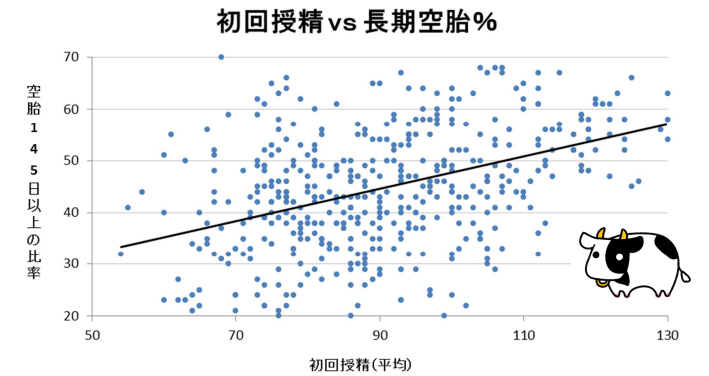
この分娩後の最初の授精がどのタイミングで実施され、その時にどれほどとまるかは、牛群の繁殖成績を最も大きく左右す



る要因となっています。2回目以降の授精、あるいは分娩後意図的に授精しない日数(VWP)と比べると、牛群の分娩間隔を決定づける重み付けは、圧倒的に初回授精の成果にあります。

現在、釧路管内全体の初回授精の平均値は89日ですが、80日以内にまでおさめている農場は全体の約30%となっています（100日以内であれば71%）。

ちなみに各農場の平均初回授精の日数に対し、長期不受胎牛（空胎145日以上）がどの程度の比率になるかを示したのが右図です（釧路全体）。戸々でバラつきがありますが、全体の傾向としては、初回授精が順調に行われるほど、長期不受胎（別の言い方をすれば、その産次での経営への貢献度が非常に低くなりやすい牛）の比率は抑えられていることが推測されます。



初回授精の遅れが意味するところは、主に次の3点でしょう。

「繁殖データが、牛舎ですぐに簡単に誰でも分かるようになっていない」、「発情発見のための観察が行き届かない」、「周産期に乳牛の不健康状態が頻発する」…これらが単独あるいは複合的に関与している場合が大半でしょう。たまたま受胎率という数値を高めるため、状態を良い発情牛を選ぶことを優先し、授精を意図的に見送るケースが多いために初回授精日数が遅くなっているということもあります。「空胎牛をなるべくスムーズに1頭でも多く妊娠牛へと移行させる」という繁殖の本来の目的と一致していれば良いでしょうが、受胎率という数値を操作するためであるとすれば本末転倒ともなりかねません。

検定月日	初回授精	
	受胎率	開始
	%	日
1. 14		81
2. 7	50	62
3. 7	100	46
11. 10		99
12. 12		67
1. 14		69
平均・計	29	74

単純に早まれば全てがOKというものでもありませんが、まずは分娩後に順調に初回授精が行われることが繁殖成績の向上、ひいては生乳生産性や経営成果のレベルアップにつながってくるでしょう。

乳検成績の中でも特に重要な数値です。

